

(二)の(5)は「待空戀」の歌題で

さりともとおもふ夜床のほと過て鳥もむなしきかきりつけ、り

と詠じているが、「智閑集」の諸本は傍点部分の「かきり」が「涙」となっている。これは歌の内容からみて「かきり」の本文が良く、諸本は恐らく「限」とあつたものを書写階梯で「涙」に誤写したことによる異同であろう。

(三)の(3)は「古寺鐘」で

五月雨ハなを晴やらて鐘のをとのくもむしるにきこゆる峯のふる寺

の本文だが、傍点部分「くも」が『私家集大成』では「空」となっている。これは原写本では「雲」となっているので誤読か誤植だが、「きこゆる」の方は、傍記の「埋る」と改訂した本文をとりこんでいる。

以上のように、一箇所の異同であり、「智閑集」の本文は自筆懐紙と比較してみても、かなり信頼がおけることを示すとともに、編纂にあたり推敲の手は加えられていないことをも示唆する。

この懐紙出現の意義は、無論、自筆の智閑の和歌が、四十八首もみいだされ、そのうち、三十四首が家集にみえない新出和歌であることに認められるが、次には、各懐紙に年月日の入っていることが、伝記上、貴重である。卷子本は年代順の配列になっていないので、ここで年代順に列挙して、若干の解説を加えておく(下の漢数字は懐紙番号)。

(1) 文明八年五月六日 尾州で法印沙汰の五十首詠歌

(2) 文明八年五月二十九日

(3) 文明八年九月二十九日 御會

(4) 文明八年九月 さくら會

(5) 文明十年二月二十日

(6) 文明十年十一月三日 柏木殿御出の時詠歌

(7) 文明十二年八月 貞秀會

(8) 文明十四年七月二十日

(五)

このうち、智閑家の月次会は毎月二十日であつたので、(5)(8)は(7)とともに自邸の歌会のものかもしれない。(4)の「さくら會」は蒲生郡の佐久良の城主である小倉実澄邸でのもの、(6)は柏木殿飛鳥井雅親が自邸に來たときのもの。実澄や雅親の和歌を介しての交誼は「智閑集」でも跡付けられたところである。

その他、(1)によつて智閑が尾張にでかけた可能性もあるし、(3)の「御會」(禁裏か將軍家かわからぬが)も注目してよい。

このように、文明年間の智閑の伝記、詠歌状況を察知できる点でも意義ある資料である。

注 「蒲生智閑集」の成立と性格(岡山大学教育学部研究集録 第四十八号)

昭和53・3。

(付記) 本稿の作成にあたり、貴重な資料の翻刻を御許可くださつ

た後藤捷一氏に厚く御礼を申し上げます。

(昭和五十四年十月十五日受理)

(一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十)

〔住所〕

(5) たれにそふこゝろなればかいか住
 さともおほえす身のまとふらん

(6) わすれよと人や契りし三木の山
 いかたつねんすきたてるかと

〔海邊眺望〕

(7) 春のあした秋の夕のなかめまで
 こゝろにこもる浦のをちかた

(8) 行ふねのかたほに見えてあわち方
 たゆたふ波にくる、かけ哉

〔解説〕

翻刻した智閑詠草は、他の智閑自筆の懐紙などと比較してみても、紛れもなく自筆懐紙と認定してよく貴重なものである。

懐紙のうち(一)(四)(五)(六)(七)(九)は一歌題に二首宛和歌を詠じ、しかも二首のうちどちらかに合点記号が付されているところからみて、歌会提出に先だつて、誰かに合点所望を行ったものと推定される。所々、本文の右側に小字で文字が書き込まれているのは、合点を行った者の添削を示す可能性がある。この小字の書き込みのある懐紙は、(一)(五)(六)(七)(九)である。以上の七枚の懐紙に対し、(三)は一歌題一首宛で、合点記号もなく、他と異なる。歌会提出時の懐紙か。そのうち(3)の歌の四句目「きこゆる」の右側に「むもる、」としているのは、他人の添削でなく、自身の推敲によるものかもしれない。残る(八)の懐紙は、唯一の「智閑」署名のもの

で、しかも一首だけである。但し、短冊ではなく懐紙に記している。次に「蒲生智閑集」とこれら一連の懐紙詠草との関係に触れておく。「智閑集」と各懐紙詠草との間には、次表のように十四首の一致歌が認められる（「智閑集」の番号は「私家集大成 中世Ⅳ」による）。

懐紙番号	一致歌番号と「智閑集」の番号
(一)	(4) 四五一・(6) 六七八
(二)	(2) 五六・(4) 六六・(5) 五八二
(三)	(1) 二〇九・(2) 二六三・(3) 七五二
(四)	ナシ
(五)	ナシ
(六)	(2) 四〇六・(3) 四四一
(七)	ナシ
(八)	ナシ
(九)	(1) 三八六・(3) 五二五・(6) 六一六 (8) 七三六

この一致歌十四首のうち、(三)の懐紙は一歌題一首のものだが三首すべて採録している。他の十一首は合点のある懐紙の歌であるが、注目すべきは、十一首すべて、合点記号のない歌の方だということである。この傾向は、拙稿で紹介した『大日本史料』の(4)(5)の懐紙のケースとも一致する。

このように「智閑集」が合点を受けなかった歌の方を収録していることは、この家集の成立や性格の一端を示唆する。即ち、特に秀歌撰という編集意識はなく、手元に蒐集できた歌でもって編纂したらしいことである。

「智閑集」と詠草の一致歌十四首間には一首を除き異同はないが、次の二首に触れておく。

夜戀

(5) 月見てもなくさむ夜ハ、なけれども
おもひ侘てハむかふそらかな

(6) いひしらぬ思ひそまざるくる、より
夜るとハ人のちきりをかぬを

(七)

文明八九 さくら會

貞秀

鶉

(1) 聲わひぬ野分あらたつ夕暮を
うらミてしもやうつらなくらん

(2) 露しもに夜やさむからしふし侘て
とこにうつらの音をも鳴かな

菊

(3) きえぬ間に露も千年をさく菊の
花にそへぬるかけをやとして

(4) 枯^{かり}やうて秋よりのちものこるへき
きくこそ花のかたみなりけれ

思

(5) 河となる涙のけたぬ思ひをは
つれなき人やたきまさるらん

(6) あさほかの人のこゝろに何ゆへか
しつむおもひと身ハ成ぬらん

(八)

水鳥

智閑

(1) なく鴨も松につくらむしかの浦や
かへりて浪のおさまれる代を

(九)

文明十霜 三 かしハ木殿さま御出之時

貞秀

独惜暁月

(1) なかむれはわか身ひとつの秋ふけて
おもかけおしき月の明かた

(2) 花^{はな}を友とたのまぬおく山の
月のなごりのあけかたの空

雪埋山路

(3) たえくのあともさひしや炭かまの
尾上につく雪の通路

(4) 花^{はな}をふむ道とや見^みまし春た、ハ
ゆきのふゝきの志賀の山こえ

納涼

(3) 吹風のたよりのミカハ松のかけ
いはもる水のをとの涼しさ

(4) かせわたるすさきの波にすゝしさの
猶色そへてさこそむれるる

(5) 恨
かすくにつもる恨もいはした、
ことハるほとの中ならはこそ

(6) おもはしよおもふ心のゆくゑこそ
はてはうらみの涙ともなれ

(五)

文明十四 七 廿

貞 秀

初秋朝風

(1) 色見えてふくとハなしに風の音の
あき来にけりと今朝はしれつゝ、

(2) 涼しくも秋のはつかせそよぎ、て
あき露なからちる一葉かな

鹿聲夜友

(3) さひしさを友とそたのむ小鹿鳴
ミ山のいほのあかつきの床

(4) わか涙さそひかほにもなくしかの
あハれ夜ふかき秋の山さと

(5) 河水流清
せをきよミ影をやとしてき舟川
水のそこにも月そなかるゝ

(6) なかれくるす系まですみぬあし引の
山の瀧つせをともしやかに

(六)

文明八 九 廿九日 御會

貞 秀

秋田

(1) 夢にさへもるかどハかり小山田の
いほりにしけき聲そふけぬる

(2) 鹿のねにおとろかさされて夢にさへ
もるやかりほのす系の小山田

暮秋

(3) なかれ行もみちを帰る道にして
水のまに秋や尋ん

(4) 紅葉、をさそひ盡して山風の
あきハくるとや人につくらん

(二)

文明十二 廿日

皆々殊勝候

貞秀

(1) 河邊柳
ぬきとめぬ花かとなみに青柳の

いと吹みたすはるの河かせ

(2) ふみたゆる道の川ハし跡ふりて

夕かせわたるさしの青柳

春月幽

(3) やへかすむ千さとの月に春もいま

いたりいたらぬかたやなからん

(4) ふくる夜の月は軒はに見えなから

梢にのこる庭のはる雨

待空戀

(5) さりともおもふ夜床のほど過て

鳥もむなしきかきりつけり

(6) いつハりと思ひハなさてたのむとも

何をまことの夕ならまし

(三)

文明八 五 廿九日

貞秀

郭公頻

(1) おちかへり鳴ともあかぬほと、きす
待しこ、ろや猶のこるらん

夏草滋

(2) いつのまに野ハしけるらん花にこし
道さへミえぬ草のむらく

古寺鐘

(3) 五月雨ハなを晴やらて鐘のをとの
くもにきこゆる峯むらのふる寺

(三)

文明十二 八月分

貞秀會

貞秀

螢

(1) ふくかせもさハラぬものハ夏むしの
空にみたる、ひかり成けり

(2) ともし火をか、けつくして明まで
とふハほたるのなになふらん

九州の詠草は法印申沙汰五十首 貞秀

貞秀

若草

春雨のきのふもけふもふるのへは
はなさかぬ草も見ゆるいろく
露をかぬときさへなひく色なれや
むらくたかき春のわか草

時雨

木葉かときけハ露もる棋の屋の
月にくもらぬ村しくれかな
いくたひもしくれや空をめぐららん
山のはことに雲のかゝれる

松

庭にさへつもるハ松のおち葉哉
みとりのいろもふかき木かけに
ときをもわかぬ屋との松かえ

(懐紙第一枚)

(一)

九州二での詠草 法印申沙汰五十首 文明八年五月六日

貞秀

若草

(1) 春雨のきのふもけふもふるのへは
はなさかぬ草も見ゆるいろく

(2) 露をかぬときさへなひく色なれや
むらくたかき春のわか草

時雨

(3) 木葉かときけハ露もる棋の屋の
月にくもらぬ村しくれかな

(4) いくたひもしくれや空をめぐららん
山のはことに雲のかゝれる

松

(5) 庭にさへつもるハ松のおち葉哉
みとりのいろもふかき木かけに
ときをもわかぬ屋との松かえ

(6) 庭にさへつもるハ松のおち葉哉
みとりのいろもふかき木かけに

蒲生智閑の新出資料

——翻刻と解説——

稲田利徳

近江蒲生郡の豪族、蒲生智閑の家集の成立と性格に関しては、先に拙稿を公表した^注。

ここでは、(1)現存諸本五本の解題、(2)『大日本史料九編の五』と『思文閣古書資料目録』掲載の智閑自筆の短冊や懐紙と家集との関係、(3)家集の詞書の吟味、(4)家集の性格などについて言及してみた。

その結果、現存諸本には異本と称すべきものはなく、皆同一系統なること、自筆懐紙と家集との間に一致歌がみいだされること、従来、詞書には不審なものが多いとされていたが、案外、信憑性のあること、家集には智閑への権威付けと、彼の神仏への深い信仰態度を顕彰せんとする面のあることなどを実証できた。

拙稿公表以後、数人の方から、私がとりあげた以外の、智閑の短冊や懐紙の存在を教示いただいたが、その中で、智閑の自筆詠草を九枚も集めた貴重な新出資料一軸が発見されたので、本稿ではその軸物を翻刻、紹介し、その後に家集との関係に触れた若干の解説を加えたい。

新出の自筆懐紙の集成一軸は、大阪市在住の凌霄文庫主の後藤捷一氏の御所蔵のものである。

箱入りの卷子本だが、箱の表には「倭哥五十首貞秀智閑老軸」、箱の裏面に「宝曆八戊寅 献春霈之 泉」と記してある。紙高二九・五糎、緞子

表紙で見開き部分に金銀切箔を散した上に河辺の景を描いてある。卷子本ではあるが、懐紙の継目があるので、懐紙を継ぎ合わせて卷子本に仕立て直したものである。各懐紙の右上には、現在ではほとんど消えかかっているもの、一―九の番号が付してある。この文字は卷子本に仕立てたとき記されたものであろう。

九枚の懐紙のうち、八枚は「貞秀」署名、一枚だけ「智閑」署名のものである。貞秀署名の懐紙の八枚には詠出年月日か歌会開催日かにあたる、年月日があり、また、合点記号、添削の跡もみえて興味もてる。

○翻刻凡例

- 一、懐紙は一首二行書きであるが、その書式を尊重する。
- 一、歌題は本文より、一―三字下りで、懐紙により若干の相違もあるが、一応、一字下りに統一する。
- 一、文字、漢字など、できるだけ懐紙通りに翻字するが、異体字など通常のものに改めたものがある。
- 一、摩滅・虫損などで判読困難な箇所は、一応、判読した文字で翻字し、それを□でかこむ。

一、便宜上、各懐紙に(一)―(九)の通し番号と各懐紙内の歌番号とを付す。